

1. 研修に求めたものと達成感について

筆者は、フラットパネルディテクタ(FPD)を用いた心肺機能 X 線イメージングの研究開発を行っている。この研修では機能イメージングの技術動向を把握し、自身の研究発展の足掛かりにしたいと考えていた。そして、期待以上の収穫を得ることができた。現地でポスドクとして仕事されている山本時裕先生の講演「CT-based Lung Ventilation Imaging」が目から鱗の内容だったのだ。呼吸過程を撮影した4DC Tを対象に肺野内のCT値変化を計測し、肺換気の推定を試みた研究である。講演後、山本先生と臨床評価の方法や呼吸生理についてディスカッションでき、大変有意義な時間を持つことができた。また、各分野の第一人者による講義は、現状や最新の知見、将来展望が惜しげもなく提示されており、これ以上ないくらい効率的に学ぶことができた。見せる 疑問を投げる ヒントを与える 答えを示す。この講義スタイルのおかげで、技術進歩の大きい MR, CT, 分子イメージング分野の知識を更新するという目的もなんとか達成することができた。さらに、音響効果、変装、景品付きクイズは、睡魔に襲われている聴講者を救済するのに絶大な効果を発揮していた。工夫を凝らした講義スタイルは真似したいものである。

2. 研修で出会った仲間との今後の関わりについて

筆者は海外の学会に参加するたびに「ともだち作戦」を実行している。すなわち、学会会場で声をかけやすそうな若手研究者を見つけては名刺を交換し、帰国後に「何か相談したいことがあったらまたメールするね！」とメールして接点確立という運びだ。こうしておくことで、後に頼み事や相談がしやすくなる。今回の海外研修ではモズレー先生の紹介もあり、大きな成果が得られた。さらに大きな収穫は、ご縁あって行動を共にすることになったゆかいな仲間たちとの出会いである。まさにブライストレス！！世代も専門もアルコール耐性度も異なるメンバーが、帰国する頃には親友のような存在になっていたと思う。しかし、この出会いはまだまだ出発点にすぎない。今後の臨床&学会活動を通じて、さらに深いものにしていきたい。学会&研究会で再会できる日が楽しみだ。



2日目のランチの様子(前列中央が筆者)モズレー先生(前列右)の仲介で今回の「ともだち作戦」では、MRI 技術分野の技師の方とお話する機会に恵まれた。

3. 日本の放射線技師のあるべき理想像(教育も含めて)

アメリカの技師のキャリア調査も今回の研修の目的の1つであった。アメリカでは担当できるモダリティが免許の種類によって明確化されているという情報を耳にしたからだ。研修期間中、5名の技師の方とお話することができたが、実にバラエティに富んだキャリアをお持ちだった。アメリカでは、2年間の技師学校もしくは4年間の一般的な大学を卒業後、試験と1~2年程度の研修を経て一般撮影の技師免許が交付される。その後、他のモダリティの免許に挑戦するかは個人次第である。モダリティによって給料が異なるので、それがモチベーションにつながっているようだった。またアメリカでは、日本の診療放射線技師が行っている仕事は、二つの職種(医学物理士、診療放射線技師)によって行われている。診療放射線技師は診療業務のみを行い、研究開発やその成果発表は博士号を持っている医学物理士の仕事になっている。この日本とまったく異なるシステムの利点をあげると、役割分担によって生まれる物理的および精神的ゆとりと、努力が賃金に反映されることによって生まれる自己成長に対するモチベーションにあると思う。今から同じシステムを日本に導入することは困難だが、なんとか日本風にアレンジして実現できないか? 役割分担, 自由選択, 自己責任, etc... 賛否両論が出る難しいテーマであると思う。研修中も数名の参加者と議論したが、結論にたどり着くことはできなかった。今後も多くの方と議論していきたいと思う。